

# 代役が見た映画祭の熱気

## 第12回ゆふいん映画祭に酔う

奥村 正雄

### ■ 羽田監督ダウン

5月のある朝、突然、羽田さんから電話がかかってきた。「由布院の映画祭に、私の代わりに行ってもらえない？」 5月29日から31日まで、大分県湯布院で開催される「第12回 ゆふいん文化・記録映画祭」に、羽田さんに代わって出てくれというのである。理由は羽田さんが突然、心筋梗塞で入院したためだ。私は監督の立場でもの言えない。



司会者の右、中央座っているのが奥村

しかし2年にまたがった中国ロケや国内の帰国残留婦人と孤児の撮影にずっと立ち合っていたから、その目に映ったものを映画祭で報告することはできる。映画祭の、3日間にわたって繰り広げられる、さまざまなイベントの最後に特別招待作品として「嗚呼 満蒙開拓団」が上映されたあと、私の目に映った制作の裏側などを話せばいい、と思って承知した。

羽田さんに代わって私が行くことになった後の映画祭事務局の対応は実に手際がよかった。飛行機の切符の手配、羽田空港窓口での手続き、大分空港到着から由布院の会場までのバス、バス停から会場まで案内してくれる係りの人の名…そうした周到な実務連絡を、事務局の小林華弥子さんが、実に手際よくメールで連絡してくれた。

### ■ 「開拓団より予科練がいい」

私が映画祭の会場に入ったのは最終日5月31日の午後。第1日目の前夜祭、第2日目の著名な監督や評論家のゲストトークと授賞作品の鑑賞に続く最終日で、ちょうど受賞者の表彰式とシンポジウムが行なわれていた。応募作65点、受賞者はベテランから初応募の若者まで、等しく初々しさが漂って、この種映画祭のメインイベントを初めて見た私にはとても新鮮だった。このあと2時間、スクリーンに「嗚呼 満蒙開拓団」が映し出され、そのあと会場をロビーに換えて私の報告と座談会が行なわれた。

私が話したのは、まだ元気一杯だった頃の松田ちゑさんから聞いた公墓誕生の裏話。仮の墓標がダム建設で移され、今の立派な公墓の墓石がハルピンから運ばれた時の担当者で黒竜江省外事弁公室の趙喜晨さんから聞いたさまざまな秘話などである。

突然、片隅でざわめきが起こった。この企画を聞いて、近郷に住む満蒙開拓団関係者が2、3人、当時の写真を持ってきて参加者に見てもらっていたのだった。司会者がそのひとりをみんなに紹介した。たったいまスクリーンで見た映像と、目の前にいる関係者が自分の頭の中でストレートに結びついた世代と、すぐには結びつかない若い世代とのずれを感じた。私のそばへ開拓団関係者のひとりが近寄ってきて言った。

「当時、開拓団に行く者が足りなくて役場からさかんに勧誘に来た。私は本当は予科錬に行きたかったんだが、親にも言われるし、しょうがなくて満州へ行ったんだよ」

当時10代の若者にとっては、憧れは予科錬、いくら十町歩の地主になれるとあおられても、開拓団へ行くのは本意ではなかった、という本音は私には新鮮に聞こえた。

## ■ 若者演出の「花のお名残会」

夜7時半、トークが終わると実行委員長の清水聡二さんに声をかけられた。

「…へ行ってみますか」

どこへ行こうと誘っていただいたのか、わからぬまま彼の後に従った。外へ出て別の通りへ出る。なにやら村祭りのメイン会場の趣きで音楽が流れ、人が大勢集まっている。

〈ああ、たまたま今日は湯布院の街の祭りで、そこへ案内してくれたのかな〉と思った。が、それは空港から会場に駆けつけ、いただいた祭りのプログラムもまだよく見ていなかった私の早トチリで、やがてここがまた「ゆふいん文化・記録映画祭」最後のイベント「花のお名残会」の会場だということがわかった。おでんあり焼き鳥あり煮物あり、酒、ビールを各自それぞれ買って、酔い、話が弾んでいる。と、なつかしい神楽の鳴り物。片隅から鬼の面をかぶった白装束の演者が地元的神楽を舞い始める。と思うとタイミングをはかった司会者の声。「はい、××さまからご寄付××円！」会場がどっと沸き、コーナーで寄付者の名と金額を書いた紙が、客の頭の上に張られた糸に手繰られて反対側へと移動する。そして周囲の壁に順に貼られてゆく。

## ■ 邯鄲の夢

10時、車で送ってもらって宿に入り、驚いた。日ごろあちこち泊りなれた貧乏宿とは別世界の高級旅館。翌朝、早朝に目がさめて散歩に出ると抜けるような青空に由布岳がそびえ、清流沿いに歩くと初老の男がハヤを釣っていた。魚影は濃い男が振り下ろすうどんエサの針は、むなしく空を切るばかりだった。

朝食のあと迎えの車が来て、同じく東京へ戻るスタッフ2人が宿泊するもう1軒の旅館へ回った。2人は毎年、この映画祭へ招かれ、応募作品の下選びを依頼されている、業界のプロである。快晴。ゆるやかなスロープが続く由布岳の山麓を大分空港へ向かう車に揺られながら、私はふと、この24時間が邯鄲の夢のような気がしてきた。